

令和6年3月29日

令和5年度 自己評価書及び学校関係者評価書

【市立札幌旭丘高等学校】

本校のスクールミッション【普通科・数理データサイエンス科共通】

- 未来社会を切り拓くための知識や技能、学び方を習得し、それらを自らの生き方や社会に活かす力を育成する学びの場
- 高く理想を掲げ、豊かな見識や感性、科学的な見方により、他者と協働して社会の発展に貢献できる人材を育成する学びの場



育成を目指す資質・能力（グラデュエーション・ポリシー）【普通科・数理データサイエンス科共通】

1 前に踏み出す力

- ・主体性 自身の考えに基づき、「判断・行動する力」を身につけます
- ・探究心 高い志を持ち、「学び続ける力」を養います
- ・貢献心 高く理想を掲げ、社会で「役に立ちたい」気持ちを育みます

2 考え抜く力

- ・思考力 物事を多角的に捉え、「気づく力」を鍛えます
- ・創造力 常識にとらわれない発想や工夫で、「新しい価値を生み出す力」を鍛えます
- ・想像力 いろいろな視点から具体的にイメージし、「表現する力」を鍛えます

3 チームワーク

- ・協働性 発信力・傾聴力を磨き、「力を合わせてともに活動する力」を身につけます
- ・しなやかさ 困難に負けない弾力のある「心」や仲間と喜び合える豊かな「心」を育みます

4 すべての基礎となる心身の健康

- ・健やかさ 自己を確立し、心身ともに健康的な生活を送る態度を育みます

<自己評価・学校関係者評価について>

①（一次評価）スクールミッションの遂行が着実に行われているかどうかをチェックするため、本校ではミッションに基づくグラデュエーションポリシーとして位置付けている「育成を目指す資質・能力」に掲出した1～4の項目について、それぞれの達成度を自己評価する。評価の基準は、下記による。

A・・・よく達成されている B・・・ほぼ達成されているが改善も必要 C・・・不十分である

評価資料は、生徒・保護者・教職員からのアンケート調査資料、およびその他の調査データとする。また、到達度が低い（A以外の）項目については、次年度における改善の方向性について示すこととする。

②（二次評価）学校評価委員が一次評価の妥当性について評価する。また、学校が考える改善の方向性について評価するとともに、コメントを記載する（特に、評価がBまたはCの場合）。評価の基準は、下記による。

A・・・適切である B・・・おおむね適切であるが一部見直しも必要 C・・・不適切である

③学校評価委員の方々の二次評価及びコメントをもとに、学校は一次評価や改善の方向性を見直しを行い、学校評価書を完成するとともに、次年度以降の計画に反映させる。また、完成した評価書については、札幌市教育委員会へ提出するとともに、学校公式HPに掲載して、地域へ公開する。

項目Ⅰ 「すべての基礎となる心身の健康」について

自己評価

B

<自己評価の根拠>

ア「令和5年度教育活動についてのアンケート」結果より

・質問項目1「自分の健康や身の安全について気をつけて行動できている」について

○「そう思う」・「どちらかといえばそう思う」という肯定的な回答が8割を超えている。

○保護者・教員の視点からも、生徒の自己評価と合致する結果が出ている。

△肯定的な回答の内訳をみると、「どちらかといえばそう思う」というやや弱気な回答が1年次で半数を占め、2年次・3年次についても、その割合は微減するが一定数存在している。また、教員の視点からは、半数以上が「どちらかといえばそう思う」を選択している。

・質問項目2『「共用の概念」をふまえ、他者のことを気遣うよう心掛けている』について

○「そう思う」・「どちらかといえばそう思う」という肯定的な回答が8割を超えている（教員の視点では、8割をやや下回る）。

○保護者・教員の視点からも、生徒の自己評価とおおむね合致する結果が出ている（特に保護者）。

△肯定的な回答の内訳をみると、「どちらかといえばそう思う」というやや控えめな回答が1年次で半数を占め、2年次・3年次についても、その割合は微減するが、相変わらず一定数を占めている。

イ「令和5年度学校保健委員会」生活・健康に関する意識・実態調査結果より（7月調査、生徒893名が回答）

・Q12 健康状態について

△自分の健康状態について「満足」「ほぼ満足」という肯定的な回答をした生徒の割合は、男子では各年次とも7割前後であるが、女子は各年次とも5割弱にとどまる。

・Q10 睡眠時間について

△6時間未満の生徒は、各年次とも男子が4～5割、女子は6～7割にのぼる。

ウ「令和5年度学校保健委員会資料」より

○自転車事故発生状況について、令和4年度は10月までに10件の事故→令和5年度は3件、負傷の程度も打撲や擦過傷と比較的軽微なものにとどまる。

△学校感染症により出席停止となった人数は、9月時点で昨年より増加。7月が67名と集中。コロナの5類移行によりマスク着用が義務ではなくなった中で、旭丘祭などのイベントの影響があった恐れあり。

<次年度に向けた改善の方向性>

・「睡眠時間や食事などの基本的な生活習慣の確立」について、生徒自身でコントロールできるよう、学校環境や家庭環境を整えるようにする。（例1）学校環境のあり方を見直し、毎日7時間授業を行っている現状の変更を検討する。（例2）ガイダンス集中期間を利用して、セルフチェックシートを作成し、それをもとに長期休業中の3者面談にて生活環境の振り返りと調整を行う。

・専門家の方に依頼し、自分自身のメンタルケアについて、トレーニング講習を実施していただくなど、弱気な生徒が一步踏み出す気持ちになる具体的な取組を工夫する。

・多感な時期の生徒で、悩みも多いことを前提に、改善結果を急いで求めるというより、自分としっかり向き合う時間を大切にすることを根幹に据えて対応する。

二次評価（4人の委員から、ABC評価は総合評価）

自己評価の適切さ （ A ）

改善の方向性の適切さ （ B ）

コメント

自分自身の健康状態を確認するにあたり、特に家庭環境を整えることへの関心を高めていただきたい。具体的に「睡眠時間」「食事」について継続して取り組むことで効果が高まるよう期待します。

「基本的な生活習慣の確立について、生徒自身でコントロールできるように環境を整える」という方向性については賛同します。「自分の健康や身の安全について気をつけて行動できている」について1年次でいささか低調であることを踏まえると、高校生活初年度でのケアが重要になると推察されます。

項目Ⅱ 「前に踏み出す力」について

自己評価

B

<自己評価の根拠>

・主体性について

「令和5年度教育活動についてのアンケート」結果より

・質問項目4「うまくいかないときには、スクールカウンセラーや教職員に相談してみようと思う」について

△「そう思わない」・「どちらかといえばそう思わない」という否定的な回答が半数を超えている。特に、「そう思わない」という回答が、生徒では2割、保護者でも1割強存在する(教員の視点では、ゼロであるが)。主体性という観点からは、一定程度否定的である方が望ましい一方で、生徒が一人で困り感を抱え込んでしまうことにならないよう、注意を払うことも必要である。

・質問項目7「自分の将来の希望を実現するために、旭丘高校の科目選択の仕組みは役に立っていると思う」について

△「そう思う」・「どちらかといえばそう思う」という肯定的な回答が生徒・保護者で8割を超えている。特に、「そう思う」という回答が、生徒は半数近い。一方、教員は肯定的な回答も7割程度にとどまり、生徒の意識と若干ギャップがある。

・探究心について

「令和5年度教育活動についてのアンケート」結果より

・質問項目6「学校の授業や行事を通して、自分が豊かな見識や感性、科学的な見方を身につけている」について

○「そう思う」・「どちらかといえばそう思う」という肯定的な回答が生徒・保護者・教職員ともに8割を超えている。探究心のベースは育っていると考えられる。

令和5年度SSHの取組の結果より

○SSHの課外プログラム「サイエンスアカデミー」7講座実施時点で参加生徒は延べ139名(普通科と数理データサイエンス科の合計)で、参加に至らなかったケースも含め、関心がある生徒が一定数存在する。参加生徒の満足度は概ね高い。

・貢献心について

「令和5年度教育活動についてのアンケート」結果より

・質問項目5「学校の授業や行事で学ぶことは、自分や社会の未来に役立つことが多い」について

○「そう思う」・「どちらかといえばそう思う」という肯定的な回答が生徒・保護者・教職員ともに8割を超えている。

・質問項目8「社会の発展に貢献したいという強い思いから、進路を選択している」について

△「そう思う」・「どちらかといえばそう思う」という肯定的な回答が6割を超えている。しかし、教職員の結果では、「そう思う」という強い肯定意見が少なく、認識のずれが若干生じている。

<次年度に向けた改善の方向性>

・過去の記録では、生徒の主体性を高めることが、放任につながると考える教員の意見もある。生徒指導提要の改定などもふまえて、学校という場において、生徒が主体性を発揮できる環境をどのように設定するのか、科目選択のほかにも、例えば生徒会行事の在り方等具体的な場面について、教職員の共通認識の形成に努める。また、そのことも含め、生徒が一層主体性をもって学校生活を過ごすことを計画する。

・数理データサイエンス科の取組も3年目を迎える。また、SSHの指定も2年目を迎え、その取組の成果がさらに拡大できるよう、校内の環境整備や既存の環境の活用等を図り、20年前に市立高校で先陣を切った「探究活動」の取組を洗練させたい。

・今後は同窓会の協力により、卒業生が社会に貢献している姿を、後輩である在校生が学ぶ機会を充実させることも検討していきたい。

二次評価(4人の委員から、ABC評価は総合評価)

自己評価の適切さ (A)

改善の方向性の適切さ (A)

コメント

学校での授業や行事で積極的に関わり学びを深める姿勢で「教養」として社会化できるように進路支援をよろしくお願いいたします。卒業生のご活躍に学ぶ機会・「探究活動」の発展を希望します。主体性について、教職員の共通認識の形成を図ることは重要であると考えます。「科目選択の仕組みが役立っている」か同課に関する生徒と先生方との意識のギャップは、主体性の捉え方の違いにあるのかもしれない。主体性と探究心は地続きであるように思われますので、生徒が主体性を発揮できる環境を整えていただければと考えます。

項目Ⅲ 「考え抜く力」について

自己評価

B

<自己評価の根拠>

思考力・創造力について

ア「令和5年度教育活動についてのアンケート」結果より

・質問項目6「学校の授業や行事を通して、自分が豊かな見識や感性、科学的な見方を身につけている」について

○「そう思う」・「どちらかといえばそう思う」という肯定的な回答が生徒・保護者・教職員ともに8割を超えている。視野を広げて多角的に物事をとらえることは、これまでも実践を積み重ねてきたところであり、さらに浸透を目指したい。

イ令和5年度SSHの取組より

○数理データサイエンス科2年次の「総合的な探究の時間」プログラム「SDS探究」では、分野に垣根を設けず、「自然科学」「工学(ものづくり)」「AI・IT活用」「社会課題解決」など様々なテーマで探究活動を行った。

○SSH意識調査(JST実施)に基づく本校の意識調査(R5年12月実施、1年次全員と2年次数理データサイエンス科対象)では、「独自なものを創り出そうとする姿勢(独創性)」の項目において、「大変増した」「やや増した」という肯定的な回答の割合が、普通科52%、数理データサイエンス科77%(全国SSH指定校調査は平均60%)と、まずまずの結果である。

×SSH意識調査(JST実施)に基づく本校の意識調査について、3年次は実施していない(数理データサイエンス科は開設されていないため)。

想像力について

「令和5年度教育活動についてのアンケート」結果より

・質問項目5「学校の授業や行事で学ぶことは、自分や社会の未来に役立つことが多い」について

○「そう思う」・「どちらかといえばそう思う」という肯定的な回答が生徒・保護者・教職員ともに8割を超えている。自分や社会の未来について、想像を働かせながら、学校生活における「学び」と結び付けて考えている姿勢がみられる。

△教職員の回答では、「そう思う」という強い肯定が2割未満であり、今後の授業や行事の改善において、どのような形で結びつきを持たせるプログラムとするのか、一層工夫する必要がある。

<次年度に向けた改善の方向性>

・項目Ⅱと共通するが、授業や行事などの計画において、どの場面でのような「育てたい力をはぐくむ」ことを見取るように考えているのか、より意識した結びつきを考え、生徒や保護者にもその意図を伝えながら推進するよう工夫したい。特に、学校行事は、生徒自身の振り返りをこうした資質・能力の育成という観点と結び付けるというアイデアがまだ浸透しきれていないので、今後の評価や改善のサイクルに位置付けることに取り組みたい。

・SSHの指定や数理データサイエンス科の実践などの効果は、一定程度現れてきていると考えられる。次年度は、数理データサイエンス科の生徒が3年次までそろうこともあり、放課後等を活用した探究が可能な日課の検討なども含め、さらに環境の整備を進め、普通科への波及効果も促進したい。

・次年度は、普通科、数理データサイエンス科とも、新学習指導要領の完成年度を迎えるので、授業内容や評価の観点と本校の「育成をめざす資質・能力」との結びつきを、より意識した授業実践が増えるよう取組を推進したい。

二次評価(4人の委員から、ABC評価は総合評価)

自己評価の適切さ (A)

改善の方向性の適切さ (A)

コメント

「数理データサイエンス科」の実践力が「SSH」校としての未来志向の学びとなるように期待したいと思います。一方で、「総合的な探究の時間」を多様なテーマを探究する活動として、生徒の各々の関心を喚起していただき、より「考え抜く」力を高めていただきたいと希望します。

・項目Ⅱ(特に質問項目8)とも関連しますが、現在の学習と社会とのつながりを学ぶ機会を設けること、「何のための探究活動なのか」を考えさせる機会の充実、DSやSSHの取り組みを一層充実させていくうえでも意義があると考えます。

・普通科とDS科との意識のギャップが少し気になります。方向性に示されているとおり、DS科とSSHの実践の効果を普通科にも波及させていくことは、旭丘高校全体として重要になるでしょう。

項目Ⅳ 「チームワーク」について

自己評価

B

<自己評価の根拠>

協働性について

ア「令和5年度教育活動についてのアンケート」結果より

・質問項目10「チームで協力して多くの人の前で発表することに自信がある」について

×「そう思う」・「どちらかといえばそう思う」という肯定的な回答が生徒は半数を切っている。一方、保護者は過半数、教職員は6割を超えている。チームで発表する取組は、数理データサイエンス科で昨年度から重点的に実践しているが、まだ多くの生徒に十分な経験となっていないことがうかがえ、学校として改善の余地が大きい。

・質問項目11「旭丘高校の良いところを地域の人たちに伝えたいという思いを持っている」について

△「そう思う」・「どちらかといえばそう思う」という肯定的な回答は、生徒・保護者で6割未満と、微妙な数字となっている。また、教職員はようやく過半数を超える状況であり、生徒を学校の広報を担う存在として育てるという視点が、これまで十分意識されてはいなかった懸念がある。

しなやかさについて

ア「令和5年度教育活動についてのアンケート」結果より

・質問項目3「うまくいかないことがあっても、何とか乗り越えようと自分で工夫してみる」について

○「そう思う」・「どちらかといえばそう思う」という肯定的な回答が生徒・保護者で8割を超えている。

△教員も肯定的な回答が多いが、その半数以上が「どちらかといえばそう思う」という控えめな肯定となっている。また、「どちらかといえばそう思わない」という、やや否定的な意見も、比較的高い割合を占めており、生徒保護者と傾向が若干異なる。

<次年度に向けた改善の方向性>

・主体性の問題と、他者との関わり方には密接な関連がある。他者との関わりが乏しい、あるいは表面的なものにとどまる場合、人格の形成に必要な自我の発達が、健全なものになりにくく、過度に依存したり、自己肯定感が低くなる懸念がある。この場合、当然主体性も低くなる。質問項目10の結果は、学校としての取組自体は機会が増えているので、予想外であった。総合的な探究の時間のプログラム「Sunrise Time」の改善をはじめとして、教育計画全体の中で、どのように育てるのかを考えていきたい。

・学校の評価は、どの学校も共通して、どのような卒業生を育てているかが大きなポイントとなる。また、在校生が、生き生きと学校生活を過ごしているのかどうかも、ポイントとなる。地域の中で、地域の学校の生徒が活躍している話題が増えることは、好印象につながり、より教育活動の充実支援につながる可能性がある。身近な社会としての地域に貢献できるような人材を育成することには、これからも力を入れていきたい。

二次評価(4人の委員から、ABC評価は総合評価)

自己評価の適切さ (B)

改善の方向性の適切さ (A)

コメント

まさに「旭丘生・卒業生」「同窓会」が地域社会に良いアピールを行うように、生徒の「発信力」を育てていただきたい。その際に、他者理解力を有するリーダーシップ(ファシリテーション力)を体得できるような教育計画を進めて、人材を育成できると良いと思う。

質問項目10に対するネガティブな回答(特に生徒の)は、「チームで協力すること」への自信の無さなのか、「多くの人の前で発表すること」に対する自信の無さなのか、この項目から解釈することは困難です。自己評価の方法に再考が必要かもしれません。

＜各項目の評価をふまえた令和5年度の総括的評価(学校の自己評価コメント)＞

・令和5年度は、新学習指導要領の取組がスタートして2年目を迎え、観点別評価の取組の着実な実施が課題であった。加えて、本校の課題としては、数理データサイエンス科の2年目の取組の充実と、1年次のプログラムの一層の充実、特にカリキュラムの中核となる「SDS探究」(数理データサイエンス科の総合的な探究の時間「サンライズデータサイエンス探究」の略称)のプログラム開発に加え、文部科学省からSSH事業指定を受けたことで、本格的に「科学的なものの見方」を身に付けたデータサイエンス人材の育成をめざすプログラムもスタートするなど、チャレンジすることが多い1年であった。

・チャレンジが多くなると、「何をするのか」というプランニングや当日の実施・運営の準備に多くの時間が割かれ、実施したプログラムを評価したり、その評価をもとに生徒や教職員が振り返りを行う場面が削られる傾向に陥りがちである。残念ながら、本校もその傾向から脱することは難しかったが、そういうときにこそ、学校の柱としてのスクールミッションやスクールポリシーに照らした評価を考えることが必要である。なぜなら、個別の実践を振り返るだけでは、往々にして生徒の視線を離れ、教員視線になるとともに、その実践の成否のみに目が向きがちとなり、各実践の積み重ねによる「スクールミッションの達成」という総括的視点が欠落しがちとなるからである。今回、これまでの学校関係者評価の項目建てや教育アンケートの項目の見直しを図ったので、次年度以降は、年度初めの教育計画もこの学校評価をより意識し、学校全体で生徒の資質・能力の育成を推進することにつなげていきたい。

＜各項目の評価をふまえた令和5年度の総括的評価(学校評議員の方のコメント)＞

・旭丘高校に学ぶすべての生徒の皆さんが、教職員の先生方と家族・保護者の方の配慮・思いやりに支えられながら、高い「スクールミッション」実現のために積極的に学ばれることを希望しております。コロナ禍後の社会的な変化、災害の発生等、様々な困難にあたりましても、着実に「スクールポリシー」を実践し続ける力を育成していただき、4つの「力」を地域社会、さらにはグローバルな環境に向かう発展の為に実現されるよう期待しております。

・新学習指導要領の全面实施とDS科のスタートが同時進行し、そこにSSH指定が加わり、とてもチャレンジングな1年であったと推察いたします。先生方の取り組み、生徒たちの活躍に、改めて敬意を表します。

・スクールミッション(特にミッション2)を遂行する上で、現在の学校での学習と社会とのつながりを学ぶ機会を設けることは、意義があると考えます。「社会貢献」というと敷居が高くなりますが、「何のための探究活動なのか」を考えさせる機会はあってもいいのではないのでしょうか。

・上記のことと関連して、現在の取り組みと社会とのつながりを意識させる機会を設けることで、生徒の目が地域に向くことが期待されます。「生徒を学校の広報を担う存在として育てる」ことも含め、これからも地域とのつながりを大切にされることを期待します。

・アンケート項目に対して改善の意見。例・Q8「社会の発展に貢献したいという強い思いから進路を選択」という表現は、「そんな思いを持たずに進路を決めてはいけない」と条件をつけているように感じさせる。結果「そうは思わない」回答が不当ではないか？ またQ5「未来社会の結びつき」とQ8「進路希望の結びつき」や、Q6「カリキュラム」とQ7「単位制の選択」はそれぞれ同質の質問ではないか？ 設問分においては別々の項目に読めても、何を切り分けて訊かれているのか戸惑いを覚えさせている。

＜令和5年度の総括的評価を踏まえた次年度の改善ポイント＞

・心身の健康の維持について、生徒がその重要性を意識しながら日々の生活をコントロールすることができるよう、引き続き働きかけるとともに、1年次からその意識づけを図るプログラムを考える。

・探究活動の充実を通して、生徒がチームを組み、科学的な見方・思考に基づき、他者と協調して課題解決を図る力を伸ばす。

・探究活動などの充実を通して、地域・社会の活性化や課題解決に目を向ける生徒の育成に今後も努める。

・教育計画の段階から、活動目的とスクールポリシーとの関連性を明確にし、その活動による到達度をもとに学校評価ができるよう、さらに研究をする。

・最近経営計画作りを簡素化した上場企業の社長の新聞記事を読んだが、そこには中短期計画の場合、作って実行したらまた次の計画が始まって、とそれに追われる社員の姿を見たであった。経営計画は企業の要諦でもそれが目的になっては意味がない。学校の運営にも計画は必要である。とはいえ(初めて参加して)「質・量ともに細か過ぎ、多過ぎやしないか」と感じた。いただいた資料の内容は大切ではあると理解できるが、これほどの膨大な量が必要か疑問を感じる(これを作成するだけでも事務作業に追われていないか)。生徒も同様で、Q9とQ10「他者との協働」を問う回答にネガティブな回答が多いのも、睡眠時間が短いのも、「忙しさ」のせいではなかろうか。「整った計画」が必要なことは理解できるが、それで校内の人間が疲弊すれば本末転倒だろう。できるだけ簡素化することが、評価の向上につな